

動詞由来複合語における主語解釈

Subject Interpretation in Verbal Compounds

二 村 慎 一

NIMURA Shinichi

キーワード：複合語・派生名詞・項構造

1. はじめに

英語の動詞由来複合語 (verbal compound) の形成には、いくつかの制約が存在する。例えば、-ing 名詞が主要部である場合、非主要部を基体動詞の主語として解釈することは難しいとされている (例：*girl swimming)。本稿の目的は、英語における3つの派生名詞、すなわち、-ing 名詞、ラテン系接尾辞を用いた名詞、そして転換名詞を主要部とする複合語に注目し、主語解釈に関する言語事実を整理することである。近年、形態論の分野でも大規模コーパスを用いた実証的な研究が行われ、新たな言語事実が報告されている。そのような言語事実も踏まえ、説明されるべき課題を議論したい。

本稿の構成は以下のとおりである。2節では、先行研究で観察されている主な言語事実を紹介し、主要部や基体動詞の種類により主語解釈の容認性に違いがあることを示す。3節では、派生名詞による項構造の受け継ぎと主語解釈との関係について議論する。4節では、転換名詞による項構造の受け継ぎについて考察する。最後に5節では、本稿の結びとして問題点を整理し、今後の展望を示したい。

2. 主語解釈についての言語事実¹

本節では、先行研究で報告されている言語事実を、-ing 名詞、ラテン系派生名詞、そして転換名詞の順に見ていく。

Roepers and Siegel (1978) や Selkirk (1982) の研究以来、-ing 名詞を主要部とする複合語では、基体動詞の主語 (外項) は第一要素には現れないとされてきた。(1) や (2) に示されるように、動詞の種類にかかわらず、主語は複合されない。

- (1) a. book-reading by students
- b. *student-reading of books
- c. flower-arranging by novices
- d. *novice-arranging of flowers ((Grimshaw (1990: 16-17))
- (2) a. *girl swimming (伊藤・杉岡 (2002: 49))

- b. *dog barking (ibid.: 50))
 c. *rain falling (ibid.)
 d. *sun-rising (長野 (2007: 315))

(1 a, c) は容認され、前者では reading の基体動詞である他動詞 read の目的語 (内項) に相当する book が複合語の第一要素となっており、後者でも arrang(ing) の目的語の flower が編入されている。しかしながら、(1 b, d) では、それぞれの主語に相当する student や novice が第一要素となっており、そのような複合語は許されない。同じように、(2) は自動詞を基にした複合語であるが、(2 a, b) の非能格動詞 (unergative) の場合も、(2 c, d) の非対格動詞 (unaccusative) の場合も、主語である girl や rain などは複合語内には現れない。

しかしながら、自動詞でも、自他交替が可能な能格動詞 (ergative) の場合は、主語解釈が許される例が存在するようである。長野 (2007) はインターネット上の実例も踏まえ、(3) のような例を挙げている。

- (3) bud-opening, fruit-dropping, ice-melting, artery-hardening, skin-darkening
 ((長野 (2007: 319))

例えば、bud-opening は「つぼみが開く」という現象を名付けたものであり (長野 (ibid.: 321))、主語解釈が可能であると思われる。²

また、Kageyama (1985) や Nagano (2010) によると、古英語期や中英語期では、主語解釈が可能であった。下記 (4) が古英語の例、(5) が中英語の例である。

- (4) eorþbeofung 'earth-trembling,' feax-feallung 'falling off of the hair,' rodor-lihtung 'sky-shining' = 'dawn'
 (Kageyama (1985: 13))
 (5) dai-dauing 'day-dawing' = 'daybreak,' drope-falling 'rainfall,' sun-rising 'sunrise'
 (ibid.: 14)

このような複合語は、(2) で示したように、現代英語では容認されないことに注意されたい (例: *earth-quaking, *rain-falling。下記 (11) の議論も参照)。

では、次にラテン系派生名詞を見ていきたい。主語解釈の容認性については、-ing 名詞との違いがしばしば指摘されてきた。(6) と (7) の例を見てみよう。

- (6) a. *student evaluating of teachers
 b. student evaluation of teachers (Itoh (1985: 21))
 (7) a. *the government-constructing of bridges

- b. ?the government-construction of bridges (Nimura (2007: 242))

(6 a) の -ing 名詞の evaluating も (6 b) のラテン系派生名詞の evaluation も共に他動詞の evaluate を基体としているが、(6 b) の複合語表現は容認され、「学生が (先生を) 評価する」という主語解釈が可能である。同じように、(7) の constructing と construction でも容認性に違いがあるようである。³

他動詞だけでなく、自動詞を基体とした場合も、同じような言語事実が観察されている。(8) は非対格動詞の例である。

- (8) a. *train-arriving
b. train-arrival (長野 (2007: 335))

(8 a) の -ing 形とは違い、(8 b) の arrival の場合は、主語解釈が許される。

また、Lieber (2010) も、動詞の種類には触れていないが、大規模コーパスである the Corpus of Contemporary American English (COCA) から下記のような実例を集め、主語解釈が可能であると述べている。

- (9) staff action, militia encampment, species evolution, fish movement, spacecraft exploration, media conversation, canon bombardment, media harassment
(Lieber (2010: 141, 142, 144))

もし staff action などが非能格動詞を基体とし、また species evolution などが能格動詞を基体としていると分析できるとすると、動詞の種類にかかわらず、主語解釈が可能であると言えよう。

では、最後に転換名詞を見ていこう。転換名詞もラテン系派生名詞と同様の振る舞いを示し、他動詞・自動詞にかかわらず、-ing 名詞との主語解釈における容認性の違いが観察されている。(10) が他動詞の例であり、(11a, b) が非対格動詞、(11c, d) が能格動詞の例である。

- (10) a. *dog-biting
b. a dog bite / dog bites
c. *bee-sting
d. a bee sting / bee stings ((Grimshaw (1990: 69))
- (11) a. *rain-falling
b. rainfall
c. *bus-stopping

d. bus stop

(ibid.)

ラテン系派生名詞と同じように、転換名詞の場合も主語解釈が容認される。

また、Lieber (2010) は転換名詞に関しても、主語解釈と考えられる (12) のような例を COCA から抽出している。

- (12) dog attack, mouse squeak, land slide, troop advance, government claim, oil spill,
eyewink, cloud burst, dogfight, thunderclap, plane crash, groundswell

(Lieber (2010: 129))

例えば、mouse squeak の squeak が非能格動詞だとすると、転換名詞の場合も、主語解釈が一般に可能であると言えるであろう。

以上、この節では、先行研究で観察されている主語解釈に関する言語事実を見てきた。では、なぜ3つの派生名詞は異なる振る舞いを示すのだろうか。次節では、この問題を議論し、定説となっている分析を概観する。

3. 項構造の継承と語根複合語

-ing 名詞、ラテン系派生名詞、そして転換名詞は、基体動詞の項構造を受け継ぐかどうかに関して異なる振る舞いをするのがよく知られている。Grimshaw (1990) によると、派生名詞は基体動詞から項構造を受け継ぐ複雑事象名詞 (complex event nominal) と項構造を受け継がない単純事象名詞 (simple event nominal)・結果名詞 (result nominal) に大きく二分される。本稿では、項構造の有無という点に着目するため、便宜上、項構造を持つ派生名詞を「事象名詞」、項構造を持たない派生名詞を「結果名詞」と呼び、議論を進めていくこととする。では、3つの名詞はどちらのタイプの名詞として振る舞うのであろうか。まず、-ing 名詞であるが、動詞的な特性が強く、常に事象名詞として働くと言われている。当該名詞が項構造を持つことを示す証拠として、(13) を見られたい。

- (13) a. They felled *(trees).

b. The felling *(of trees)

(Grimshaw (1990: 50))

(13a) の fell は他動詞であり、目的語の具現を必要とする。これと同じように、(13b) の felling も目的語が具現されなければならない。このことは -ing 名詞が基体動詞の項構造を受け継いでいることを示唆するものである。⁴

では、ラテン系派生名詞はどうであろうか。(14) に示されるように、事象名詞と結果名詞の両方の用法があると言われている。

- (14) a. The examination took a long time.
 b. The instructor's examination of the patients took a long time. (ibid.: 51)

(14a) の examination は結果名詞であり、項構造を持たない（したがって、項は具現されない）が、(14b) のそれは事象名詞であり、項が具現される。

最後に転換名詞であるが、(15) の非文法性が示すように、一般的に項構造を受け継がないとされる。

- (15) a. *the cook of stew (Roeper (1987: 286))
 b. *the buy of clothes (伊藤・杉岡 (2002: 80))
 c. *the drive of this car (Borer (2013: 53))

つまり、cook、buy、および drive は項構造がない結果名詞ということになる。

以上をまとめると、-ing 名詞は項構造を持つが転換名詞は項構造を持たない、そしてラテン系派生名詞は持つ場合と持たない場合がある、というのが定説となっている。ここで、複合語の主語解釈の問題に戻りたい。2節で観察した派生名詞の種類による違いはどのように説明されるのであろうか。

まず、-ing 名詞であるが、一般的な分析は（具体的な定義は異なるが）内項のみが複合語内で具現されるというものである (cf. Oshita (1995)、伊藤・杉岡 (2002)、長野 (2007)、Nagano (2010))。つまり、事象名詞である -ing 名詞には、基体動詞からの項構造の受け継ぎやその具現に関してある種の規則が存在するという分析である。この分析により、外項（他動詞と非能格動詞の主語）は複合語内に現れないことになり、(1) から (3) の大部分の共時的な事実を説明することができる。⁵

次に、ラテン系派生名詞や転換名詞の場合では、なぜ主語解釈が可能になるのであろうか。一般的な分析は、主語解釈が可能であると思われる複合語は、項構造を持たない結果名詞が主要部となっている語根複合語である、というものである (cf. Grimshaw (1990: 69))。例えば、student evaluation や rainfall は主語解釈が可能な複合語であるが、それらの主要部名詞 (evaluation や fall) は項構造を持たない結果名詞であるため、第一要素 (student や rain) の解釈（編入）に制限はなく、そのような複合語は自由に形成されるということである。つまり、見た目上は派生名詞とその基体動詞の主語の複合のように見えるが、ice-cream のような [単純名詞+単純名詞] の複合と同じ構造ということになる。

このような主語解釈の複合語を語根複合語として分析する方法は、-ing 名詞の通時的な事実の説明においても採られている。2節で述べたように、古英語や中英語では主語解釈が可能であった。Nagano (2010) は、古英語や中英語の -ing 名詞は現代英語とは違い、項構造を持たない結果名詞であり、したがって、その複合語は語根複合語であったと主張している。(16)

は古英語の Ælfric's Catholic Homilies と Orosius からの例で、(17) は中英語の The Canterbury Tales からの例であり、-ing 名詞が結果名詞であったことを示唆している。⁶

- (16) a. Pilatus he hæfde on þreatunge. . .
 [þreatunge < ðereatian 'to threaten']
 'He held Pilatus in threatening. . .' (Orosius 136/1)
- b. þære lufe fandung is þæs weorces fremming.
 [fremming < fremman 'to accomplish']
 'The proof of love is the performance of work' (Homilies 2/314/26-27)
 (Nagano (2010: 121))
- (17) And certes every man, mayden, or wyf
 May understonde that Jhesus, hevene king,
 Ne wolde nat chese a vicious lyvyng. (The Canterbury Tales, WB 1180-1182)
 'And surely every man, maiden, or wife can understand that Jesus, heaven's king,
 would not choose sinful living.' (ibid.)

(16a) の þreatunge は他動詞を基体としているが、項が具現されておらず、(16b) の fremming は be 動詞の補語となっている。また、(17) の lyvyng は不定冠詞と共に起している。(結果名詞が be 動詞の補語になり、不定冠詞と共に起するという議論に関しては、Grimshaw (1990: 55) を参照。)

また、丹羽 (1995) も (複合語の分析とは独立して) 古英語の -ing 名詞は、結果名詞の用法が主であったと述べている。下記 (18a) は The Old English Version of the Heptateuch の Genesis からの例であり、(18b) は King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care からの例である。

- (18) a. ðæra wæter gegaderunga he het s. (1: 10)
 gathering
- b. seo feding ðara sceapa (43, 5)
 the feeding of the sheep (丹羽 (1995: 121))

(18a) の gegaderunga は「集まった結果の事物」としての意味であり、(18b) の feding は「養い=飼料」に近い意味である (丹羽 (ibid.: 121)) ため、それらは結果名詞であると分析できるだろう。⁷

以上、この節では、複合語主要部の項構造の有無が主語解釈の可能性を左右するという考え方を概観した。主語解釈を許す複合語は語根複合語であるという分析が意味することは、主語

解釈の多くは (内項の編入のような) 何かしらの規則や制約から導かれるのではなく、単なる例外であるということである。次節では、この分析の妥当性について論じたい。

4. 転換名詞による項構造の受け継ぎ

主語解釈を示す複合語の多くは語根複合語であるという上述の考え方は、常に成り立つのだろうか。つまり、主語解釈が可能であるにもかかわらず、複合語の主要部が事象名詞である例は、bud-opening のようなタイプの複合語の他に存在しないのだろうか。確かに、-ing 名詞における通時的な事実、すなわち、古英語期や中英語期には主語解釈が可能であったという事実は、それらの時期の -ing 名詞は結果名詞としての用法しかなかったとすれば、「語根複合語の分析」により適切に説明されるかもしれない。しかしながら、ラテン系派生名詞には事象名詞と結果名詞の両方の用法があるとすると、当該複合語が主語解釈を示す場合、その主要部が事象名詞ではないということを裏付ける詳細な議論が必要になろう。実際、Nimura (2007) では、(7b) で挙げた government construction のような主語解釈を示す複合語の主要部は項構造を持つ事象名詞であるという可能性が示唆され、そのうえで複合語への主語の編入を認可するシステムが提案されている。詳細は Nimura (ibid.) に譲るが、以下では、転換名詞においてもこのような可能性がありうることを示唆するデータを提示したい。

転換名詞は項構造を受け継がないというのが定説となっているが、例外が存在することはよく知られている。下記のように、項の具現を許す転換名詞が存在する (constant や frequent と事象名詞との共起に関しては、Grimshaw (1990: 50) を参照)。

- (19) a. the review of the book by the New York Times
 b. the use of drugs by the children (Roepert (1987: 289))
- (20) a. my constant change of mentors from 1992-1997
 b. the frequent release of the prisoners by the governor (Borer 2003: 53)
- (21) a. the frequent repair of the motorcycle
 b. the frequent capture of illegal immigrants
 c. the frequent collapse of the king (Harley (2009: 341))

上記の例のほとんどが他動詞の読みであるが、(21c) の collapse は自動詞 (能格動詞) を基体としていると考えられる。

確かに、転換名詞が項と共起していると思われる例は多く、下記は筆者が The British National Corpus から集めた実例の一部である。

- (22) a. Iran on Sept. 10 repeated its claim of sovereignty over the Gulf islands of Abu Musa, Tunb al-Kubra and Tunb al-Sughra , and rejected a Sept. 9 statement by

- the six-nation Gulf Co-operation Council (GCC) supporting the UAE's sovereignty [see below] Keesings (*Contemporary Archives*.1992)
- b. This drawing was reproduced on the front of their change of address cards.
(*Glenpatrick News*.)
- c. Oliver 's beach friends straggled into the café, grumbling at the abrupt change of weather.
(*Guilty knowledge*.1988)
- d. But Ludens became aware that Irina was now quietly crying, quietly and continuously her tears streamed down, not like a waterfall, but like the gentle slide of water over smooth stone. (*The message to the planet*.1989)
- e. At the edge of his flashlight beam he could see the dampened flowers, flattened now by the steady fall of rain. (*Condition black*. 1991)
- f. POLICE were following a new lead yesterday after reconstructing the last walk of murdered Tracey Carey, 20. Policewoman Trish Issacs dressed in identical clothes for the walk through Trowbridge, Wilts, to the house. . .
(*The Daily Mirror*. 1992, 8)

(22a, b) が他動詞、(22c, d) が能格動詞、(22e) が非対格動詞、そして (22f) が非能格動詞を基体としていると思われる。もちろん、これらの転換名詞は項構造を持たない結果名詞であり、共起している項 (と思われる要素) は修飾語である可能性は否定できない。しかしながら、少なくとも、Grimshaw (1990) による結果名詞の判断基準からすると、不定冠詞とは共起しておらず、複数形でもなく、be 動詞の補部にもなっていないため、結果名詞ではない可能性がある。もしこれらが事象名詞であるとする、転換名詞が主要部である複合語を常に語根複合語であると分析することはできなくなる。例えば、(22a) の claim が項を持つ事象名詞だとすると、2 節で見た government claim は語根複合語ではない可能性があり、にもかかわらず、主語解釈が可能であるということになる。

5. 結び

本稿では、-ing 名詞、ラテン系派生名詞、および転換名詞を主要部とする複合語の主語解釈とそれと密接に関係する項構造の継承に関する言語事実を考察してきた。少なくとも、今回の考察から明らかになった、説明されるべき課題は下記の3点である。これらの問題点の具体的な説明に関しては、稿を改めて論じることとし、ここでは今後の展望のみを述べたい。

- (23) a. -ing 名詞の複合語における主語解釈は、非対格動詞や能格動詞を基体とする場合に容認性が規則的ではなく、「内項の編入」といった分析だけでは説明できない例が存在する。例えば、*rain falling や *weather-changing などは、内項を編入し

ているにもかかわらず、容認されない。このような例は規則だけでは説明できないが、何か他の理由で (例外として) 排除できるかもしれない。可能性として、伊藤・杉岡 (2002: 51)、Nimura (2004: 312) や長野 (2007: 324-328) でも指摘されているように、非対格動詞自体に -ing 接辞は付加しにくいこと (例: *the arriving of John (Alexiadou (2001: 51))) や、能格動詞の場合は、対応するラテン系派生名詞や転換名詞が存在していること (つまり、change_N が優先される) が考えられる。しかしながら、もしこのような考え方が成立するのであれば、逆の可能性もあるかもしれない。-ing 名詞の主語解釈は (内項の編入ではない) 何か他の規則により原則不可能であり、(3) の ice-melting のような主語解釈の複合語が「例外」として容認される、という考え方である (このよう考え方に関しては、Nimura (2004: 312-313) も参照)。

- b. 転換名詞は一般に名詞性が強く、基体動詞から項構造を受け継がないと考えられているが、項 (のような要素) の具現を許す転換名詞が存在する。もし転換名詞が結果名詞としてだけでなく、(項構造を持つ) 事象名詞としても働くという可能性があるのであれば、その複合語を一律に語根複合語として分析することはできないことになる。だとすると、主語解釈は結果名詞であると分析される時のみに可能となるのか、それとも事象名詞の時でも可能となるのかという新たな問題が出てくる。さらに、もし後者の時でも可能であるとすると、なぜ可能となるのかの体系的な説明が必要になるであろう。
- c. もし上記 (b) の可能性があるだとすると、-ing 名詞だけでなく、転換名詞 (やラテン系派生名詞 (注3を参照)) も視野に入れ、主語解釈の有無を統一的に説明できる枠組みを考える必要がある。どこまでの言語事実を規則や制約で説明し、何を例外として扱うのかの線引きは難しいが、複合語の解釈 (や形成) の仕組みを解明するには、そのような考え方も必要になるであろう。

注

1. 本節は Nimura (2007) の第2節に加筆・修正を加えたものである。
2. 同じ能格動詞でも、下記 (i) は容認不可とされており、下記 (ii) のような複合語はほとんど使用例が見当たらないようである。本文 (11c) も参照されたい。

(i) *population growing, *earth quaking (伊藤・杉岡 (2002: 50))

(ii) *river-freezing, *earth-flattening, *skin-drying, *sun-sinking

((長野 (2007: 319))

3. 第3節で議論するように、evaluation や construction は項構造を持たない結果名詞 (result

nominal) であると分析されるかもしれない (cf. Grimshaw (1990))。だとすると、teacher evaluation などは、いわゆる語根複合語 (root compound) であると分析され、teacher は項ではなく修飾語ということになり、「主語解釈」という表現は正確ではないかもしれない。このことは、(本文ですぐ行く) 転換名詞の議論においても言えることである。しかしながら、Nimura (2007) では、(7b) のような例の construction も (-ing 名詞と同様に) 項構造を持っていると主張されている。3 節以降の議論も参照されたい。

4. もちろん、例外が存在し、下記のような -ing 名詞は語彙化しており、結果名詞であろう。

(i) building, painting, saving(s), writing ...

5. (2c, d) の *rain falling や *sun-rising の fall や rise は非対格動詞であるため、rain や sun は内項となる。このような複合語がなぜ容認されないのかに関しては、この分析 (だけ) では説明できない。この問題に関しては、5 節で議論する。

6. (16) は Nagano が児馬 (2000) から、(17) は米倉 (2006) から引用したものであるが、児馬の文献は、筆者は入手していない。

7. 丹羽 (1995) には中英語の -ing 名詞についての詳しい言及はないが、Niwa (1993) によると、中英語期には -ing 名詞は事象名詞としても使われはじめ、The Canterbury Tales にも項と共起している例があり、結果名詞から事象名詞へと変わる (動詞性を発達させていく) 過程であったと思われる。下記は Niwa (1993: 37) からの例である。

(i) a. Lat me allone in chesyng [choosing] of my wyf

(The Clerk's Prologue and Tale, 162)

b. For which they were as glad of his comyng as ...

(The Shipman's Tale, 50)

(ia) では of 前置詞句として項が具現され、(ib) では属格形で具現されている。詳しくは、Niwa (1993) を参照されたい。

参考文献

- Alexiadou, Artemis (2001) *Functional Structure in Nominals: Nominalization and Ergativity*, John Benjamins, Amsterdam.
- Borer, Hagit (2003) "Exo-Skeletal vs. Endo-Skeletal Explanations: Syntactic Projections and the Lexicon," *The Nature of Explanations in Linguistic Theory*, ed. by John Moore and Maria Polinsky, 31-67, CSLI Publications, Stanford.
- Grimshaw (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.

- Harley, Heidi (2009) "The Morphology of Nominalizations and the Syntax of *vP*," *Quantification, Definiteness, and Nominalization*, ed. by Anastasia Giannakidou and Monika Rathert, 321-343, Oxford University Press, Oxford, New York.
- Itoh, Takane (1985) "On Incorporation of Predicative Expressions in Verbal Compounds," *English Linguistics* 2, 21-41.
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 研究社, 東京.
- Kageyama, Taro (1985) "Configurationality and the Interpretation of Verbal Compounds," *English Linguistics* 2, 1-20.
- 児馬修 (2000) 『古英語における派生名詞の記述的研究』 (平成 10・11 年度科学研究費補助金 基盤研究 C 研究成果報告書) (課題番号 10610462), 東京学芸大学.
- Lieber, Rochelle (2010) "On the Lexical Semantics of Compounds: Non-Affixal (De)verbal Compounds," *Cross-Disciplinary Issues in Compounding*, ed. by Sergio Scalise and Irene Vogel, 127-144, John Benjamins, Amsterdam.
- Nagano, Akiko (2010) "Subject Compounding and a Functional Change of the Derivational Suffix *-ing* in the History of English," *Studies in the History of the English Language V*, ed. by Robert A. Cloutier, Anne Marie Hamilton-Brehm and William A. Kretzschmar, Jr., 111-131, De Gruyter Mouton, Berlin, New York.
- 長野明子 (2007) 「英語の *-ing* 形動詞由来複合語における内項主語の複合」『レキシコンフォーラム No.3』 影山太郎 (編), 315-334, ひつじ書房, 東京.
- Nimura, Shinichi (2004) "Formation of *-ing* Nominal Compounds and Event Feature Checking," *English Linguistics* 21.2, 294-322.
- Nimura, Shinichi (2007) "Subject Incorporation and the Types of Derived Nominals," *Exploring the Universe of Language: A Festschrift for Dr. Hirozo Nakano on the Occasion of His Seventieth Birthday*, ed. by Masachiyo Amano, Kozo Kato, Makiyo Niwa, Ko-ichiro Hamasaki, Tomoyuki Tanaka, Yusaku Oteki, Kay Nakago and Eiko Mizuno, 239-253, Department of English Linguistics, Nagoya University, Nagoya.
- Niwa, Makiyo (1993) "Nominalization Suffix and Argument Structure: A Note on the Canterbury Tales," *Linguistics and Philology* 13, 25-42.
- 丹羽牧代 (1995) 「中英語のクレオール性試論」『南山短期大学紀要』 第 23 号, 113-128.
- Oshita, Hiroyuki (1995) "Compounds: A View from Suffixation and A-Structure Alternation," *Yearbook of Morphology 1994*, ed. by Geert Booij and Jaap van Marle, 179-205, Kluwer, Netherlands.
- Roeper, Thomas (1987) "Implicit Arguments and the Head-Complement Relation," *Linguistic Inquiry* 18, 267-310.
- Roeper, Thomas and Muffy Siegel (1978) "A Lexical Transformation for Verbal Compounds,"

Linguistic Inquiry 9, 199-260.

Selkirk, Elisabeth (1982) *The Syntax of Words*, MIT Press, Cambridge, MA.

米倉綽 (2006) 「古英語、中英語、初期近代英語における語形成」『英語の語形成：通時的・共時的研究の現状と課題』米倉綽 (編著), 2-207, 英潮社, 東京.